



このように、非文字資料研究センターの3週間の滞在は本当に素晴らしい経験になった。日本人の研究者と話す機会が持てたこと、日本の図書館を利用できたこと、

もちろん実地調査できたことは豊かな研究経験になった。本当に、非文字資料研究センターに感謝したいと思う。

近代日本基督教の伝道活動と民俗的な注目 ——明治時代横浜市の考察を中心として

沈 梅 麗
(華東師範大学对外漢語学院)



近代日本の基督教布教活動は、布教にあたって日本民俗の現象を研究し利用することを重視しているが、これは、基督教が外国へ布教した伝統と大きな関係がある。基督教が外国へ布教した歴史からみると、宣教師は布教先に到着すると、できるだけ早くその土地の風土や人情を学んだ。その布教の戦略は、現地の文化への適応性という特徴を表している。つまり、このような文化適応性は、実はその国の伝統文化と儀礼風習に適度に従うということを表しているのである。

また、本文が述べる「近代」の概念は主に中国史学会が定義するもので、その期間は大体 1840 年から 1919 年であり、日本の明治時代（1868－1912）とほぼ重なっている。

明治時代横浜地域の宣教師団体の中で、アメリカ長老

会の宣教師ヘボン（James Curtis Hepburn）夫妻（左図）の影響は大きく、彼らは 1859 年神奈川に上陸してから明治開教（1873 年）前の十数年の間に、医者しながら密かに伝道していた。当時、このように宣教師が西洋医学を日本に伝え広め



図1 アメリカ改革長老派教会ヘボン（James Curtis Hepburn）夫妻（横浜開港記念館）

た勢いは非常に大きく、日本皇漢方医道が徐々に衰退に至り、日本の伝統医療の習慣に大きな変化をもたらした。宣教師が医者身分を通して伝道する形はザビエルの時代からすでに存在し、1563 年来日のポルトガル宣教師ルイス・フロイス（Luís Fróis）は、日本の宣教師がよくハンセン病など差別される病気を治癒し、彼らは時々日本の薬でも病を

治したが、患者にそれを教えなかったと記載している。

明治 8 年開教以後、基督教は日本での布教活動が順調ではなかったが、宣教師たちは多くのやり方で布教をすすめた。例えば、日本最初の横浜神学校明治学院のような教会学校を創立したり、『常盤』、『女学雑誌』（横浜明治学院岩本善治などが創刊）などの教会雑誌を創刊し、更に慈善活動にも積極的に参加していた。これらの形式を通して基督教信者を拡大する努力をする一方、宣教師たちは神学校、教会女学校、教会新聞などのメディアを通して日本社会の民俗を批判した。例えば、日本の婚姻の形式、男性の小児性愛の悪しき習慣、女性の入浴習慣及び性概念などである。また、禁酒を提唱し、日本の服装が華美すぎることを、日本の多神教崇拜なども批判した。宣教師たちは以上のようなやり方で、日本社会に基督教文明を輸入したのである。

明治時代の日本民俗全体を見れば、基督教の布教は一種の策略として展開されたが、ヘボンなどの欧米宣教師たちの努力のもと、日本伝統社会のあらゆる方面ですでに西洋の基督教文明は浸透していたのである。



図2 “酒不可飲”（女学雑誌 275 号 明治 24 年 7 月 25 日）